



人文学におけるデジタル学術空間の形成—仏教学をモデルとして

研究者所属・職名：
大学院人文社会系研究科・教授

ふりがな しもだ まさひろ

氏名： 下田 正弘

主な採択課題：

- [基盤研究\(A\)「仏教学デジタル知識基盤の継承と発展」\(2019-2022\)](#)
- [基盤研究\(S\)「仏教学新知識基盤の構築—次世代人文学の先進的モデルの提示」\(2015-2018\)](#)
- [基盤研究\(A\)「国際連携による仏教学術知識基盤の形成 — 次世代人文学のモデル構築」\(2010-2013\)](#)

分野：思想、芸術およびその関連分野

キーワード：人文情報学、Digital Humanities、仏教学、SAT大蔵経テキストデータベース

課題

●なぜこの研究を行ったのか（研究の背景・目的）

人類の文化全体を研究対象とする人文学には久遠の過去からの、多様な形態の、膨大な量の知識がある。情報通信革命が急速に進むなか、それらをデジタル媒体へと転換し、新たな学術空間をつくることは、人文学の将来がかかった重要な課題である。二五百千年を超える歴史をかかえアジアの広大な地域にわたり西洋の知と融合した仏教学においてこの企図を果たすことができれば、次世代人文学のモデルとして人文学全体に有益な知見と機会を提供できるだろう。

●研究するにあたっての苦労や工夫（研究の手法）

学問分野の基盤となる知識のデジタル媒体への転換という前人未踏の試みを、急速な勢いで進む情報通信技術を踏まえながら進めるためには、これまでの人文学が依拠してきた研究対象の性質と知識の構成の方法とを明示化しつつ、国際的枠組みのなかで情報学・情報工学と連携を図る必要がある。そのためにはDigital Humanities（人文情報学）という新学術領域を日本に構築する企図のうえに課題を遂行してゆかねばならない。



図1 大蔵経テキストデータ



人文学におけるデジタル学術空間の形成—仏教学をモデルとして

研究成果

●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

世界三大宗教の一つである仏教学の知識基盤をデジタル媒体に転換するという課題を遂行するなかで、日本の人文学が将来にわたって解決すべき、いくつかの重要な問題点の抽出と解決の方向の提示ができた。その第一は、仏教学という分野を超え人文情報学分野において世界の30を超える大学、図書館、諸機関と広く国際的ネットワークを構築したこと、第二は、人文学の研究対象を構成する(1)文字(ISO/IEC)、(2)画像(IIIF)、(3)テキスト(TEI)のそれぞれにおいて国際標準の策定に携わりえたこと、第三は、日本Digital Humanities学会を創設し日本の研究者を国際学会に連携する役割を果たしたこと、第四は、専門研究者と一般社会との連携を実現し人文学知を共同で構築する体制を構築しえたことである。これらは個別研究成果の範囲を超え、人文学の成立基盤自体を日本の社会と国際環境において次世代に向けて整えた意味をもっている。

現在、SAT大蔵経テキストデータベースは漢語の仏典コーパスを中心とし、ハンブルク大学、コロンビア大学、大英図書館、フランス国立図書館等の知識基盤と連携しつつ、アジアから発信する代表的人文学データベースとして40を超える国と地域から年間1200万件を超えるアクセスを記録する知識基盤となっている。ことに欧米のアジア関係図書館からの注目度と信頼度は高く、UCバークレーを始めとする諸機関との連携を拡大させつつ、新たな学術空間をつくりあげている。

図2 文字の国際標準 ISO/IEC新規格登録文字

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

今後は、一見矛盾する二つの方向を同時に視野におさめて進んでゆく。第一は、進化する情報工学ことにAI関連技術の利用を可能にするためSATデータベースのテキスト構造化を図ることであり、第二は、デジタル化とは無縁な従来型の研究の有効性を担保するため、デジタル学術空間外にその領域を確保することである。体系の内外にあるこの両者の効果的関係が今後の人文学研究を開いてゆくだろう。



図3 テキスト分析